

2014年10月4日 東京農工大学リーディング大学院プログラム「観察力を養う～実践美術鑑賞～」
レポート

////////////////////////////////////

本センターはこれまで、京都大学 物質－細胞統合システム拠点 (iCeMS=アイセムス) や iPS 細胞研究所、独立行政法人科学技術振興財団と共同プロジェクトを行うなど、美術とはかけ離れていると思われがちな科学の分野にも、活動の幅を広げてきた。そしてこの度、東京農工大学リーディング大学院プログラムの秋講座「観察力を養う～実践美術鑑賞～」に、本センターの福と岡崎が登壇した。本講座は、教養を習得することが、農学・工学分野の研究における発想力、表現力、創造性を向上させると同時に、社会や他者に対する理解と交流を助ける、人間力の向上に重要な役割を果たすとの考えのもと、企画されたものである。

今回の参加者は、修士・博士課程をあわせた計 11 名の学生で、大半が美術鑑賞の経験は少ないとのことであった。当日は「みる」「アートとコミュニケーション」をテーマに、講義とワークショップ、ACOP で 2 作品の鑑賞を行った。本レポートは、参加者が美術鑑賞や ACOP をどのように捉え、科学にどう活きたと感じたのか、アンケートの声をご紹介し、まとめたものである。

■美術鑑賞に対するイメージの変化

- *美術鑑賞に対するイメージが変わった。センス、フィーリングや時代背景の知識がなくとも、論理的思考力をもって鑑賞を楽しめることを知った。
- *芸術鑑賞は感覚的なものだと思っていたが、本講座では直感的に感じたことを「なぜ？」と問い直すことで論理的にディスカッションが進んでいったことが面白かった。感覚に理由を探し、それを他人に伝えるという行為は私にとって新しく、難しかったが、美術に関する知識がなくともこんなに鑑賞を楽しめるということがわかってよかった。
- *作品についての知識をもった上で鑑賞し、何かしら共感したり、作者の思いを馳せるのが美術鑑賞の楽しみ方だと思っていた。しかし本講座での ACOP 実践を通じて、何も知らなくても楽しむ方法があるのだとわかった。皆で絵の考察を進めていくことは楽しかったし、未知への考察という点で確かに科学と楽しみ方は共通していると思った。

「専門的な知識がなければ、美術鑑賞は楽しめないと思っていた」、これは学外へ赴いて ACOP を行う機会の多くで、参加者からいただく言葉である。もちろん、知識が鑑賞の助けになることはある。しかし、じっくり時間をかけて作品をみて、考えれば、知識がなくとも多くの解釈や発見がみつき、鑑賞は十分に楽しめる。ひとつの可能性に縛られることなく、見続け、考え続けることで、美術鑑賞は「知らないから、わからない」ものではなく、科学同様「知らないからこそ知りたい、興味がわいて面白い」と感じられるものになるのだ。



■“みる”ことへの理解

- *“みる”ということが非常に重要である。また、意識して“みる”ことが、科学にも重要だということを知った。
- *美術史に頼ることなく、アートを見る ACOP という体験は非常に刺激的だった。対象を「みる」行為はアート以外にも活かすことのできる「才能」ではなく「能力」であると感じた。訓練により与えられる「能力」をどこか「感性」ではないかと考えてしまっていたアートから教えられたのは感動的だった。
- *hear-listen 聞くと聴く、のように意識して「みる」という手法を実践的に学ぶことができた。みているものを言語化して相手に分かりやすく伝えることは意外と難しく、しかし訓練すれば、それまで気づけなかったこともみえてくるのだと分かった。

ただみている状態と、意識的にみている状態は異なる。人は自分の経験や価値観を通して、物事をみている。そのことを自覚して意識的に物事をみれば、そこから得られる情報の見落としを防ぎ、新たな発見や解釈を生み出す可能性を高めることができる。

みることは能力であり、鍛えれば鍛えるほど高められる。美術鑑賞は、科学にも重要な観察力を高めるトレーニングとして機能し、さらに、そのプロセスには知的好奇心の刺激も起こるのだ。

■アートとコミュニケーションについて

- *アートをただ見てだけでなく、コミュニケーションの媒体として使うことができるということを知り、身をもって経験した。ブレインストーキング・ACOP とともに、普段意識していなかった言葉による伝え方、言葉の使い方、観察力を認識させられた。シナジー効果、多様性を活かす、言語的・論理的・批判的コミュニケーション力という講師の先生のキーワードが ACOP の特徴を的確に表していて印象的だった。
- *Art とは、作品と鑑賞者の間に生まれるコミュニケーションであることを学びました。作品中の細かなところを意識的に見て、様々なことを考えることで、Art の楽しさが深まることを発見できました。(中略)それぞれ異なる考えを伝え合うことで、Art の深みがぐっと増すことが体験できて良かったです。

アート作品とアートは異なる。アート作品はモノ、アートはコト＝作品と鑑賞者の間で起こるコミュニケーションである。ACOP はグループで作品鑑賞を行うため、作品と人だけでなく、人と人とのコミュニケーションも起こる。自分とは異なる多様な他者と対話することで、作品鑑賞が深まるだけでなく、思考力やコミュニケーション力を養うこともできる。学生たちは、ACOP が鑑賞教育であり、コミュニケーション教育でもあることを、実感してくださったようだ。



■ 科学との接点

*論理的思考は理系にとって必要なスキル。美術館で養える。

*研究の場面においても、隅々までじっくりとみる、考えること、気になったことを伝えて、コミュニケーションを通じて新たな発見を得ることが出来そうだと感じた。

*先生がセミナーの中で言っていたが、観察力がないと研究の中の重要な発見を見落とすことになるので日ごろの研究でも注意しようと思う。

*論理的に“みて”考えることが科学においても人生においても重要だと思うので、様々な場面で意識し、重要な“こと”“もの”に気づくことができると感じた。また芸術を見るときに、大事なことは“みる”こととコミュニケーションであることがわかり、今後壁を作ることなく、美術品に触れていけると思う。

*ACOPのように自分の考えを論理的に説明したり、聞いたりする中で1つの方向に向かって合意をつくっていく方法は、そのまま日常に応用できる。例えば合意形成を目的とする会議や研究ディスカッションの場等では、私たちは意外と論理的にディスカッションをできていない。ACOPは芸術鑑賞でありながら、ディスカッションの練習でもあると感じた。

感覚的なもの、あるいは専門的な知識が必要なもの、はじめは参加者にとって、美術鑑賞は自分たちとの距離が遠いものだった。しかし、そのイメージは変化し、観察力や論理的思考力、コミュニケーション力など、自分たちの研究にも必要な力が養えるものだと、気付かれたようだ。美術鑑賞は決して、限られた人たちだけが楽しむものではない。誰もが楽しめ、さらには、科学に生きる力はもちろん、人間として生きていくために必要な「みる・考える・話す・聴く」という、本質的な力を高めるものなのだ。

今回参加して下さった学生が、美術鑑賞を通して「みる・考える・話す・聴く」力を磨き、今後研究者として活躍されることを願っている。貴重な機会を頂戴し、誠にありがとうございました。

(文 アート・コミュニケーション研究センター 講師 岡崎 大輔)